
気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

【Nコード】

N5066Y

【作者名】

澤群 キヨウ

【あらすじ】

暑い夏の帰り道、僕は師匠に出会った。情けなくてだらしなくて、だけど愛すべきおっさん。これは僕と師匠の、二十歳も差がある二人の不思議な友情の物語。

中編・不定期更新

出会い

僕はその光景をただただ、黙ってみていた。

額から血を流した師匠が、手錠をかけられてパトカーに押し込まれていく。

足が一步だけ、前に出る。唇が震えて、声を出すことはできなかつた。

(師匠……、師匠……！)

僕は師匠の名前を知らない。苗字が、多分、山城さんなんじゃないかな、くらいにしか知らない。

(師匠……！)

*

僕と師匠の出会いは、ちょうど一年前のこと。

通っている小学校は築四十年近いボロいもので、当然ながらプールもボロい。プールサイドで散々日光に晒されて、日焼け止めなんかまるで意味がないと思えるコンガリ感にうんざりしながら帰り道を歩いていたら、声がかかったんだ。

「よう、少年！ プールか？」

それがどこからした声なのか、僕はキョロキョロと辺りを見回した。そして、道路右手にあるオンボロアパートの2階の窓辺でタバ

コをフカしている中年が発生源なんだと特定し、無視を決め込んで再び、家に向かって歩いた。

「無視かよ！ 今の小学生はなつてねえなあ！」

無遠慮に斜め上後方から罵られて、もちろんちよつと腹がたつたけど、振り返らずに歩いた。危ないオッサンの相手なんかしたら危ないから。

次の日もプールだった。先生に出席のスタンプを押しもらったプールカードを眺めながら一人、家に向かって歩いていたら、声がした。

「よう、少年！ 勤勉だな。今日もプールがご苦労さん！」

リズムカルに楽しそうに、その中年は笑顔で声をかけてきた。今日はタバコではなくて、凍らせて吸うタイプの細長いアイスを手にかけている。

「一緒にどうだ？」

小学生は知らない人の誘いに、そう簡単にはのらない。そういう風に大人が教えてくるから。

知らない人から物をもらってはいけない。

知らない人についていたらいけない。

「なあ！」

だから僕は無視をした。当然だ。プール帰りの小学生をアイスでつろうなんて、なにか邪まな考えをしている人に違いない。たまには男の子が好きな変な人もいるって、聞いたことがあるし。何をするのかわからないけど、きつとおぞましいことなんだろうと思う。そんな体験はまっぴらごめんだ。

「少年！」

上からかかる声を避けるようにして、僕は身を低くして走った。

土日を含んで、月曜日はまたプールだった。憂鬱な気分で、ただお母さんに心配をかけたくないから笑顔で家を出る。それでバシヤバシヤ泳いで、先生の話の間は日差しに焼かれてもう真つ黒になったみんなの背中を見ながら過ごして、またバシヤバシヤして。

今日も一人で家に帰る。友達がわいわいと連れ立って帰るのを見送って、最後の一人になってから学校を出た。

「よう！ もう真つ黒だなー、小学生！」

懲りずにまた、声をかけられた。その時思ったのは、僕も懲りてないなっということ。変なおじさんに声をかけられたくなければ他の道を行けばよかったのに。なんとなく土日を含んで時間が空いていたから、もう諦めているだろうとか、普通の会社勤めならいない時間帯だからいないんじゃないかとか、そういう楽観的な事を考えていたんだなっ。

「暑かったろう。毎日頑張る君に、ご褒美を用意している！」

しかも今日は窓からではなくて、道のと真ん中で待っていた。あの辺りにパラパラとひげが生えていて、髪は暑苦しく肩の辺りまで伸びていてすごくだらしない。着ているTシャツはよれよれだし、下はハーフパンツ一丁。この格好で外に出ていいのは、誰の目にもつかないようにササッと出る、朝のゴミ出しの時間だけだと思う。

僕はちよつと悩んだ。どうやって避けようかって。来た道に戻るか、おじさんの横をすり抜けていくか。

「アイスだ。先週のは安かったからイヤだったんだらう？ 本日はこれを用意したぞ！」

おじさんは丸いカップのアイスをドーンと前に突き出してきた。有名なメーカーの、年中売ってるバニラ味のアイスクリームだ。この炎天下で僕が通るのをずっと待ち構えていたのだとしたら、あの

中身は多分もう液状になっているだろう。案の定、突き出したアイスのカップは汗だくになって、ポタポタと水滴を地面に落としている。あれをもう一度冷凍庫に入れれば固まりはするけど、シャーベツトみたいにシャリシャリになってしまつて、滑らかさも美味しさも損なわれているアイスではない別な何かが出来上がる。一度やったことがあるから、知ってる。

「すみません、いりません」

小声で手早く答え、すり抜けようとしたんだけれど。

「好みではなかったかな？ 一応冷凍庫に、チヨコレート味も用意しているぞ」

おじさんはニカツと笑顔で、とおせんぼしてきた。やっぱり、回れ右、したほうがいいのか。

「失礼します」

振り返つて、一気に走ろうと思った。けど、手を掴まれてしまった。

「待ってくれ」

お母さんに持たされた防犯ブザーはランドセルにつけばなしだ。もし周囲にこの危機を知らせたいのなら、叫ぶ必要がある。できるか、僕に。誰か助けてください！ 変質者です！ って大声をあげられるか？

「少年、俺に協力して欲しいんだ。けつして怪しい者ではない！」

「怪しいじゃないですか」

掴んだ手は離さないし、まず最初に物で吊ろうとしてきた。そんなやり方をしてくる大人に警戒しないのはよっぽどめでたいチビっこだけだと思う。

「俺はライターをやつてるんだ。シナリオ書いてんの。で、今の男子小学生のリアルな心情を知りたいんだよ」

「ライター？」

火をつけるもの、ではないって、少ししてから気がついた。物を

書く人だ。シナリオを書いている。なるほど。だけど、やっぱり見
ず知らずの小学生に声をかける方法としては今のやり方は非常識過
ぎて、頭から信じることはできそうにない。

「すみませんけど」

「頼む！ 少年は俺のイメージにピッタリなんだ。小学校の前で随
分探したんだけど、少年が一番だったんだよ。だからさ、話だけで
も聞いてくれないか？」

結局しつこさに根負けして、僕はおじさんの部屋に通されていた。
いつでも逃げられるようにと、おじさんは笑いながら僕をドア側に
座らせて、しかもドアは開けっ放しにしてくれた。

部屋の中はクーラーがそもそも設置されていなくて、蒸し暑い空
気を扇風機が散らしているだけ。

蝉の鳴き声がこれでもかかっていうくらい大きな音で聞こえてくる
中、スツとアイス差し出された。

「こっちは俺が後で食べるわ」

さっきまで炎天下で溶かされていたバニラ味は冷凍庫にしまわれ
て、僕の前には、バニラと同じメーカーのチョコアイスとプラスチ
ックのスプーン。

「暑いだろ？ 遠慮なく食べてくれ！」

「……頂きます」

カップのふたを開けて僕がアイスを口に入れると、おじさんは満
足そうに笑った。

「少年はゲームが好きだろうか？」

おじさんは狭いテールブルの上に、紙をバサバサと広げていった。

「シナリオを書いていかないといけないんだが、登場人物の中に男子小学生のキャラクターがいるんだ。何せ俺が子供だった頃と時代が全然違うだろうか？　なので、君の話聞いてちょーっと参考にさせてもらいたいんだな」

広げられた紙の中からイラスト入りのものを選び出して、おじさんが見せてくる。そこには、気の弱そうな表情の眼鏡の男の子の絵が描かれていた。

「ちょっと気が弱くて、いじめられてるけど親には言えなくて、ネットに憂さ晴らししてるっていうキャラなんだぞ！」

胸が疼いた。

そんなキャラクターのイメージにピッタリだって言われたら、普通なら怒ると思う。

だけど僕は怒らなかった。ドキリとした。

「俺の小学生の時にはネットなんかなかったからさ。少年達は生まれた時から、携帯もインターネットも『あつて当然のもの』だっただろう？　だから、感覚が違うと思ってなあ」

僕の表情を見て、おじさんはニツと笑った。

「少年もインターネットやるか？　なんだ、あの、ちっちゃいキャラクター動かしてさ、ネット上での友達作ったりとかしたことはある？」

答えようと動かした口の中が甘い。チョコレート味の、ポリウー
ムが売りのアイスは半分食べたところで止まっている。食べ過ぎて
ちよつと頭がキンキンしていたから。だけどこの残り、どうしよう。
冷凍庫にしまっておいて、おじさんが後で残りを食べる？ それは
ちよつと、気持ち悪い。嫌だ。

「アバターですよ。ね。やったことはあるけど、もうやめました」

「そうか。みんながみんなハマるわけでもないんだな」

答えながらちよつと悩んで、結局続きを食べ始めた。熱い空気が
アイスをどんどん溶かしていつて、カップの底には茶色い池が出来
ている。

「現実の友達と、ネット上でできた友達に差はあった？」

ぼたりとアイスがテーブルの上に落ちて、小さな円を描く。

「……ないよ、そんなの。違うように思ったこともあったけど、結
局は一緒だった」

僕の呟きに、おじさんはうんうんと頷いている。笑顔で。

みんなが遊んでいるという交流サイトに、僕も誘われて参加して
いた。それぞれの名前をつけて、そっくりにしたキャラクターを作
って、放課後はいつもパソコンの前で遊んでいたんだ。

だけど僕は、それにすぐについていけなくなった。お金を払わな
いでサイト内の通貨を手に入れる方法も、話題についていくために
やらなくてはいけない無料のゲームも、すべてが次々に移り変わっ
ていく。画面の中で新しく知り合った仲間を紹介され、そのすべて
にちよつとずつ付き合っていく。誰かが気まぐれに言い出した楽し
そうなものに一日中付き合わされて、ひとつでも取りこぼせばもう
仲間はずれ。学校でもいつの間にかサイトの話しかしていない皆の
中には混じれなくなっていた。どうやって友情を取り返したらいい
のかわからず、右往左往する僕。華麗にスルーしてくる、かつての
友達。パソコンばかりしてらっってお母さんからは白い目で見られ、

宿題も忘れ、目はしょぼしょぼとして、肩も重い。

疲れた疲れたばかり言っているおじいちゃんほとんどかわり
のない、へとへとの僕。

楽しかったはずのことが苦痛になってしまった息苦しい世界。

考えるだけで目の前が少し暗くなる。

「少年！ 恋はしてるか？」

「はい？」

うつむいていた顔をあげると、本当に愉快そうな笑顔のおじさん
が目に入った。

「恋だよ。ラブ。好きな女の子、いるだろ？」

「いないよそんなの」

「本当かあ？」

体のだ真ん中の部分から、ゾワゾワとした何かが広がる。熱い
ような冷たいような、気持ちの悪い感覚だ。こんな風になんでもか
んでも口にして子供をからかう大人は僕は好きじゃない。

「もう帰ります」

「なんだよ、照れてるのか？ ハハハハ！」

横においていたプール用のバッグを掴んで、僕は立ち上がった。
おじさんは目をまあるくして、立ち上がった僕を見上げている。

「帰ります」

「え？ 本当に？」

呑気な声を背中に聞きながら、靴を履く。かかとを踏んだまま、
急いで廊下へと出た。

「また来て話聞かせてくれよー！」

そんな声がしたけど、返事はしなかった。

次の日はプールへ行くフリをして、図書館へ向かった。

友達に会うのは嫌だった。水の中でも、例のサイトの話ばかりなんだ。時折みんなで固まって、僕の方をチラチラ見ながら何かを話している。ヒソヒソと聞こえないように声を交わして、最後に大きな声で笑う。

先生に何を笑ってるんだ、って怒られても、すいませーんと悪びれもせずに答える。ニヤニヤしたまんま。

そんなかつて友達だった連中を見て、僕はお母さんとお祖母ちゃんのことを思い出した。お母さんとお祖母ちゃんはあまり仲が良くない。お祖母ちゃんは、お父さんの方のお母さんだ。いわゆる「嫁と姑」というやつで、「折り合いが悪い」。だけど年に何回か、二人は強い結束を見せる。叔父さん夫婦が来た時だ。お父さんの弟の奥さんである、麻衣子叔母さんのことが、二人は好きではないらしい。オブラートに包む必要なんかないか。はつきり言って、嫌ってる。麻衣子叔母さんは化粧が濃いいし、叔父さんのことを人前でも平気で罵る。みんなの前で文句を大きな声で言って、タバコをスパ吸っては鼻から煙を出し、お酒をガブ飲みする。従兄弟である悠翔君と妃芽ちゃんの状態もお母さんそっくりで、かなり悪い。

人は、共通の敵がいる時に最も団結するんだよって、お父さんは僕に言った。

つまり僕は、みんなの「敵」になったって事だ。敵という言葉は大げさかもしれない。けれど、みんなにとって僕は「何をしたら構わない」「傷つけても構わない」存在になっている。実害はない。目にも見えない。けれど僕は傷ついている。あちこちから血が噴き出しているような心を抱えて、一人きりで夏休みを過ごしている。

そんな僕のおかげで、みんなは友情を深めている。

僕は最近、そんなことばかり考えていた。やめたいのに、やめられない。止まらないネガティブシンキングに勝手にうちのめされて、心の中でそつと泣いている。

「よう、少年！ 奇遇だな！」

図書館の本棚の間を彷徨っていると、後ろからこんな声が聞こえてギクリとした。

「夏休みに読書とは、感心じゃないか！」

「静かにしてください！」

「すみませんっ！」

すぐそばにいた係の人に怒られたのに、謝る声のトーンは落ちない。

僕は、心底嫌だなあ、と思った。デリカシーのない、頭の悪そうな大人。こういう人はわかったフリをして、人の心にズカズカ踏み込んでくるんだ。踏み込んで散々荒らして、何も答えない僕を「恩知らず」に位置づける。

「読書感想文の宿題があるなら、お勧めの本があるぞ」

「ありません」

「ははーん、さては、涼みに来たんだな？ 図書館はいい。夏の子供の最高のオアシスだ。何せ涼しいし、休めるスペースはあるし、水は飲み放題だし、怒られない。むしろ感心じゃないかと褒められる！」

「静かにしてくださいよ！」

「すみません」

二度目の謝罪はさすがに声が小さくなっていた。それでも、静かな図書館の中では無駄に響いて、他の来館者達から冷たい視線を送られている。

「こつるさいよな、あのオバチャン」

係の人が去ると、おじさんは調子に乗って僕にこつ耳打ちしてきた。

「おじさんが悪いと思います」

「真面目で結構だね」

運が悪いなあ、と思った。

いや、これはプールをさぼった罰だ。お母さんに嘘をついたから、バチが当たったんだ。

このおじさんに会いたくないっていうのも、サボった理由の一つだったのに。

後ろ暗い事をした僕。

当然の報いだ。

「おお……」

しょぼくれてうつむく僕の後頭部付近を、唸り声が通り過ぎる。顔をあげると、おじさんが僕の後方、遠いところを見ていた。

なんだろう、と思わず振り返る。チラリと見える、真っ白いワンピースの女の人。

「美しい」

でれでれとしただらしない顔が見ていたのは、琴美さんだった。去年同じクラスだった高橋君のいとこのお姉さん。遊びに行った時に会った事が一回だけある、清楚で優しい印象のお姉さんだ。

琴美さんがこちらを向いた。図書館の貸し出しカウンターの前。手続きが終わって、振り返ったところで目が合う。長いストレートの髪をふんわりと揺らして微笑むと、僕に軽く手を挙げてくれた。それにぺこりと頭を下げる。

僕のこと、覚えててくれたんだ。

「おい！」

そんな事を考えていたら、ボカンと頭を叩かれた。あまりの衝撃に、よろける。

「少年はあの人と知り合いなのか!？」

「ちよつと! お静かになって言ってるでしょうが!」

何故か僕まで一緒に怒られて、おじさんとセットで図書館から追い出されてしまった。暑い暑いアスファルトの道路の上に出ると、一気に汗が噴出してくる。恨めしい気分ですわらず睨んでみたら、予想外に真剣な表情のおじさんがこう僕に告げた。

「少年。話がある」

やっぱり、罰なんだろう。嘘なんてつくもんじゃないなと後悔しても、もう遅い。

僕はおじさんに手を引かれて、図書館のすぐ近くにあるファーストフードの店に連れて行かれた。

接点

日本で一番有名なファーストフード店。窓際の小さなテーブルの上には、お子様向けのハピハピセットが置かれている。ハンバーガーに、ポテトに、多分コーラ。おじさんの前には、水。

「ほい」

そしておまけのオモチヤだ。大人気アニメの、主人公のフィギュア。僕も好きで見てるけど、主人公よりも一緒に旅をしてるクールなキャラの方が好きだったりする。

そんなことを知るわけもなく、主人公のフィギュアを僕の手にぎゅうつと押し込みながらおじさんはこう言った。

「少年、あのお姉さんの名前を教えなさい」

ただひたすら戸惑う僕の向かいには、至極真剣な表情。

「ええと……」

素性の知らないおじさんに、琴美さんの名前を教える。

「やっつていいこと」なのかどうか考えたら、それはちよつとダメな気がする。

「個人情報保護法に違反するんじゃないでしょうか」

「はははは！」

どうして笑われてしまったのか。僕にはちよつとわからなかったけど、おじさんはニカツと歯を出して笑顔を作ってから、僕にこう言った。

「高橋さんだということを知っているぞ。音楽大学に通っていて、ピアノが上手なお嬢さんだということもな」

「知り合いなんですか？」

「うむむ。何故、ほにゃららさんを知ってるんですか？ って言わ

ないんだ？」

呆れた。ひっかけるつもりだったのか。

僕がブスツとした顔をしたからか、おじさんもちよつとムツとした顔になった。そして手を伸ばしてきて、ポテトをつまんで食べた。

「美しい人の名前を知りたい。それは、人間として当然の欲求なんじゃないか？ 少年だってテレビで可愛いアイドルが映っていれば、何て名前なんだろうって知りたいだろう？ そう思わないか？」

「それは確かにそうですね……」

そんな経験は確かにある。そういう場合、僕はじつと名前が出てくるのを待つか、インターネットなんかで調べるけど。

「でも、琴美さんは芸能人じゃないですから」

「……そうか。そうだな。その通りだ。一般人と芸能人じゃ勝手が違う。少年は常識を弁えた立派な小学生のようだな。実に感心だ」

おじさんは大きくうんうんと頷いて、水を飲んだ。

その様子に僕は安心して、一緒になってポテトをつまんだ。

「ハンバーガーも食べなさい」

「……でも、もらう理由がないし」

「ポテトは食べられるのに、ハンバーガーがダメというのは何故だ？」

確かに。ついうっかり、気楽な気分でポテトをつまんでいた自分に、笑う。

「成長期の子供が遠慮したらいけないぞ。無理矢理連れてきて悪かったし、お詫びだ」

そうだった。おじさんの妙なペースに巻き込まれて、何故かこんなところで向かい合って座ってしまっている。名前も知らない怪しげな男。しつこくて強引で……。

「やっぱりいいです。僕、帰ります!」

「そうか?」

立ち上がる僕に、おじさんはさっとフィギュアを押し付けてきた。
「またな!」

また会って、どうしようって言うんだ。

気持ち悪い。

未使用のプールバッグをブンブン振りながら、暑い道の上を歩いて帰る。肌の表面を太陽にじりじりと焼かれながら、気分はズンズンと沈んでいく。

嘘をついた。プールに行くって言ったのに、行かなかった。胸がきゅゅと締め付けられる。もし、来てませんよって先生から家に連絡が行ってたらどうしよう?

そんな心配をしながら汗だくで帰った僕を迎えたのは、背中を向けたままのお母さんだった。クーラーの利いたリビングで、お気に入りのドラマの再放送をみてる。

「水着洗つときなさいよー」

「うん」

振り返らない背中に、ガツカリするような安心するような複雑な気持ちになりながら洗面所へ向かう。乾いた水着を洗面器に張った水に漬けて、洗うフリ。未使用のタオルを取り出して、ため息。これをどうしようか、っていう事と、僕は何をやってるんだらうっていう後悔で目を伏せる。

ちよつと悩んでから、洗った水着をタオルで包んでみた。そして、スィムキャップの存在を思い出して、慌てて取り出す。すると、ロンと落ちてきた。ハピハピセットのおまけのフィギュアだ。無理矢理押し付けられて、結局つれて帰った主人公。そして、非常識な

おじさん。

僕は一人の女性を守ったんだ。気の利いた受け答えで危機をかわした。

あれ？

瞬間的に、頭の中に蘇った。僕が口走った、今世紀最大のミス。

でも、琴美さんは芸能人じゃないですから

背中をゾワゾワつと撫でる、これが悪寒というものか。しまった、やってしまった。おじさんはあの後、なんて答えた？僕は馬鹿だ。嘘つきな上に馬鹿だ。一気に混乱の渦の中に落ちて、頭の中を駆け巡る不快感と戦う。

会話はさらつと流れて行った。もしかしたら、おじさんは気付いてないかもしれない。いや、しらんぷりしながら、しめしめって思ってるのかも。でも、名前を知っただけだ。名前だけで何ができる？いや、名前がわかれば何か、騙すようなことも、琴美さんのことを詳しく調べられることもできるかもしれない。

水着とタオルを持ったまま、廊下をうろつく。慌てる自分に喝を入れて、なんとかそれを洗濯ばさみで挟んで干すと、僕は家を出た。

「おう、少年。どうした？」

おじさんの家の前にたどり着いたものの、そこからどうしたらいいか迷って扉の前でウロウロしていた僕はこの声にかなり驚いた。ビクツとした。マンガみたいに、うわあっとなった。

「もしかして俺の仕事に協力してくれる気になったのか？ そいつは嬉しいね！」

笑顔で僕の肩をバン、と叩いて、おじさんが扉を開ける。呆れたことに鍵はかかっていなかったらしい。

意を決して、あがる。

この間と同じ位置に座って、まずは持ってきたフィギュアを机の上に乗せた。

「なんだ？」

「これ、お返しします」

真剣に言った僕の言葉に、おじさんは笑った。外で鳴いている蝉よりも大きい声で。体を反らせて、それはそれは楽しそうに笑った。

「何がおかしいんですか!？」

「いや……、だってお前、オマケだろう？ それ」

その通りだけど。

「いらぬなら捨てればいいのになあ。少年、律儀だな！」

まだゲラゲラと笑っている。よくみたら、涙まで浮かべているおじさんの顔を見て、僕は心底恥ずかしい気分だった。いや、恥ずかしいとかじゃない。僕がここに来た目的はフィギュアの返却じゃないんだ。これはあくまできっかけに過ぎない。

「あの一！」

「あははは」

まだ大きな声で笑いながら、おじさんは僕にお茶を出してきた。多分麦茶と思われるものが安っぽいコップに注がれて、二つ並ぶ。

「ええと、あのですね」

「何だろうか」

どう切り出したらいいのだろうか、悩む。僕が思わず口走ったセリフ、ちゃんと聞いてましたか？ いやいや、こんな事言ったらただのバカだ。だけど何て聞いたら確認できるんだろう、琴美さんの名前、聞いてたかどうかって。

言いよどむ僕。そして、ニカッと笑うおじさん。

「なあ、素敵な名前なんだな、彼女。イメージどおりだった」

「！」

「コトミって、どういう漢字を書くんだ？ やっぱり、楽器の琴に、美しいとかか」

ビンゴだ。いや、まあそれはいい。それより、やっぱり聞いてた。自分の間抜けさを呪う。さりげなく、この人も気が付かれないようにしれっとした態度を取っていたわけだ。

なんだかやけに悔しい。

「どうする気なんですか？ 琴美さんの名前知って、何をする気なんですか？」

「何って……別に何もしゃしない。ただ、美しい姿にあった、美しい名前だっつうつとりするだけだ」

「……」

「なんだその顔は。では少年、逆に聞くが、俺が何をすると思ってるんだ？」

「えっ」

思わぬ質問にあって、焦る。そしてどう答えたらいいのか混乱した拳句、つい言ってしまった。

「ストーリーとか」

笑っていたおじさんの顔が、急に引き締まった。

「少年。それをいうなら、ストーカー行為、が適切だな。ストーカーする、と言ってしまう気持ちはわかる。だが日本語としては正しくないし、俺のような紳士に向かっている言葉ではない」

前半の指摘をちよつとだけ重く受け止め、その後が続いた言葉には顔をしかめる。そんな僕を見て、おじさんも同じように顔をしかめた。

「少年の気持ちはわからないでもない。確かに、少々怪しい男として映っているだろうとは思っていた。突然声をかけ、なれなれしく接し、見た目も小汚い」

「はい」

「だがな、……おい、今『はい』って言ったな、この野郎！ まあいい。それはいいんだ。とにかくだな、ちゃんと知ってもらえば、わかってもらえるはずだ」

何をだろう。

おじさんはえっへんと腕を組んで仁王立ちしたまま黙っている。

「何をですか？」

「……少年、頼むぜ」

何をだろう？

「見たらわかるだろう。俺が、悪事を働くような人間じゃないってことが」

おじさんが目を見開いて、僕の顔を覗きこんできた。

タバコを吸う人独特のイヤな臭いに、思わず目を閉じる。

「ちゃんと見なさい。人の目を見て話しなさいって教わったろう？」

「いや、ちよつと、あの」

「何だ？ ほら。ほらほらほら！ この輝きが目に入らぬか！」

最後には手で両方のまぶたを押し広げて顔を近づけてくるおじさんのあまりの大人げのなさに、僕は吹き出してしまった。多分ツバが飛んで顔にかかったはずなのに、おじさんはまったく退かない。

「わかったからもうやめて！」

「わかればいい！」

満足そうに微笑むおじさんに、本当に力が抜けた。こんな変な大人に会ったのは初めてだったから。

だけど久しぶりの楽しい空気に、この時僕は、すごく嬉しい気持ちになっっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5066y/>

気になる師匠が閑静な住宅街で全裸になった

2011年11月29日02時45分発行